

おわりに - 研究の成果と活用

以上の報告をしてきたが、最後に研究の成果と活用に関してまとめておきたい。まず、研究成果であるが、次の6項目に整理することができる。

(1) 「エンパワメント」に関する文献研究

米国の黒人開放に関する公民権運動に起源を見るエンパワメントという言葉は、使用する者によって内容が異なる現状があった。社会福祉分野(特に障害者福祉)においては、近年になり頻繁に使用されるようになったが、何を示しているのかという統一見解がないことが理解できた。

(2) 「パワレス状況」に関する研究

パワレス状況にある者が「エンパワメント」されていく、という仮説を立てた場合に、パワレスというものを明らかにしていかなければならなかった。この研究において、全てのパワレス状況を設定できた訳ではないが、パワレス状況を生み出す要因を提示できたと考えている。

(3) 「エンパワメント」の定義確立に関する研究

エンパワメントの定義が確立していなかったので、障害者分野を主とした定義付けを試みた。「エンパワメント」とは、同様の生活環境にある一般状況と比較してパワレス状況にある者が、政治・経済・社会的場面等における一般水準の獲得を試みた時に、個々が有する能力の向上・社会環境の改善・個人と社会環境との調整という方法を用いて、そのパワレス状況を改善していく諸過程である、とした。

(4) エンパワメントに関する個人調査研究

京都から広島までの各地における20事例を個別調査し、その中から9例を取り上げ、評価・分析を試みた。生まれながらにして、または幼い頃から障害をもつ人たちと人生の半ばにして障害を受けた人たちとの間には、エンパワメントという観点においても違いが見られた。幼児期から障害をもつ人たちは、自らのストレングスを強化することにより、エンパワメントしていくことが多く、逆に中途障害者の場合には、人的なものも含めた環境を整備・強化していくことによりエンパワメントしていくことが分かった。

(5) エンパワメント実践活動に関するプログラム研究

障害者自立生活支援センターで実践されている自立生活プログラムの実態を調査した。自立生活プログラムやピアカウンセラー養成講座と称されているエンパワメント・プログラムは、個人のストレングスに着目し、心理的なエンパワメントのみを対象としている観点が強いことが明らかになった。障害の完全受容や人生の目標設定という事柄も重要ではあるが、「前向きに生きる」という姿勢をどのように確立し、どのように支援していくかが大切であることが理解できた。

(6) エンパワメント・プログラムに関する実践マニュアル要素の提示

障害をもつ人たちがエンパワメントしていく過程において、何らかの「影響を与えた人(Effective Person)」との出会いが大きな要因となっていることが明白になった。この「影響を与えた人」とは、結果的には意識的・無意識的に関わらず登場してきているが、実践

マニュアルの要素を提示するにあたり、作為的に出会いを経験させることも必要であるという見解を基本に作成を試みた。

6項目に分けて研究成果をまとめてみたが、この研究は今後も継続していかなければならない。特に、エンパワメント支援プログラムを構築していかなければならない役割は、たいへん重要なものがあると痛感している。このプログラムの確立こそが、障害をもつ人たちの自立生活を可能にしていくと言っても過言ではない。

そして、この研究成果の活用としては、次のような項目が期待できると考えている。

(1) エンパワメント定義の活用

特に障害者福祉分野でのエンパワメント定義を確立し、提示したことにより、障害者福祉関連施設や各種教育機関においても、使用語彙の統一が為されることが期待できる。

(2) パワレス状況を回避する方策の提供

親子・兄弟姉妹関係を中心にパワレス状況へと誘導するシステムを明解にしたことにより、障害児の家庭教育や教育機関での状況が改善されることが期待できる。

(3) 個人調査結果の提示と活用

様々な障害をもつ状態とパワレス状況にある「個人の生き様」を提示させていただいたことにより、エンパワメントしていく道標が提示できたと考えている。エンパワメントしたいと願っている障害をもつ人たちに対して、これらの事例を提供することにより、「前向きな姿勢」になることが期待できる。

(4) エンパワメント・プログラム実践マニュアルの提供

障害者福祉関連施設や養護学校等の教育機関、さらに障害児のいる家庭に対して、実践マニュアルを提供していくことにより、エンパワメント教育を質的に向上させることが期待できる。また、相談支援事業者や病院からの退院支援に関わる者に対しては、一定の指針を与えるものとして評価されたいと考えている。

今回の調査研究における重要な柱は、障害をもつ人たちの生きてきた道筋を検証していき、エンパワメントというキーワードを基軸に、何を感じてパワレスとなり、何をもって分岐点として上向きの思考に変化したのかを実証論的に明らかにしてきた。このプライベートな個別調査を快く受けてくださった障害をもつ人たちと家族の皆様が、多大なご協力をいただいたことで、本研究が成立したといえる。御家庭に訪問させていただく形の調査に対して、積極的にご協力いただきました方々と、熱心に聞き取っていただきました調査協力員の皆様に、心からの感謝を申し上げます。ありがとうございました。

厚生労働科学研究
平成 16 年度厚生労働科学障害保健福祉総合研究事業

障害者のエンパワメントの視点と生活モデルに基づく
具体的な地域生活支援技術に関する研究

2005 年 3 月発行

編集 主任研究者 谷口 明広
印刷 ケイデザイン社
